

新しいグリーン・ツーリズムの展開に向けて
—これからの大学生のためのトポフィリア・ツーリズムの提案—

生物資源科学部 アグリビジネス学科
1年 新堂 秀 1年 鈴木 花菜
1年 今井 朝飛 1年 原田 楓花
1年 平野 喬也
生物環境科学科 1年 高貝 遥暉
指導教員 生物資源科学部 アグリビジネス学科
重岡 徹 酒井 徹 林 芙俊 末永 千絵

I. 研究の背景と目的

私たち大学1年生は2000年代生まれである。一方グリーン・ツーリズムは、1992年に農林水産省が提唱した政策課題の一つとして始まった地域活性化活動である。2023年までに全国各地で多様なグリーン・ツーリズムが数多く展開してきている。

ここではグリーン・ツーリズムを先行研究に倣い「みどり溢れる、ありふれた農山漁村を楽しむアクティビティ(=活動、行動)」と定義するが、その意図するところを「現代都市社会において、人間関係のストレスを脱し、世間の喧噪を逃れようとする現代人のニーズに応えるもの」であり、都市生活とは異なる農村生活を体験することで、心身ともにリフレッシュすることを目的とするツーリズムと考えている。こうしたグリーン・ツーリズムの社会的な認知状況は旅行業界の調査によると、グリーン・ツーリズム体験者の8割が50歳代以上のシニア層であり、またグリーン・ツーリズムに関心・興味を示すのも同様の傾向を示すと報告されている。

一方で、農村振興施策においてグリーン・ツーリズムは、少子高齢化で極度の不振にあえぐ農村地域を再生する手段として取り組まれてきているが、我々の世代にとってグリーン・ツーリズムは言葉すら聞いたことがない人が多い。グリーン・ツーリズムが農村サイドで大きく期待されるにもかかわらず、その国民的な認知と関心が若者世代(10歳代後半から30歳までの世代=いわゆるZ世代)に乏しく、その世代がグリーン・ツーリズムという世界とかけ離れていることは大きな問題ではないだろうか。私たち若者世代は急速で広大な情報網の中で思春期を送り、情報過多というストレスにさらされてきている。こうした若い世代特有のストレスから一時的にも逃れ得る日常とは異なる場所や時間などの非日常的な体験を求めている現状がある。

そこで、私たちは若者世代とグリーン・ツーリズムのマッチングこそ、今日の農村振興戦略において重要ではないかと考え、若年層世代の関心が向くような施策を提案する。今回は、実際にグリーン・ツーリズムを体験するグループと、体験せずに理想のグリーン・ツーリズムを考案するグループに分かれ、双方の意見を合わせて新たな施策を立案し、提案する。

II. グリーン・ツーリズムの実体験調査

【調査の目的】

大学生がグリーン・ツーリズムを体験することによって、自身がグリーン・ツーリズムをどう感じ、どのような心境の変化が現れるのかを調査するため、11/18～19に1泊2日の日程で、秋田県で初めて農家民宿を開業した仙北市の泰山堂にて、農泊体験調査を実施した。また、体験したのはそれぞれ出身地の特徴が異なる4人のメンバーである。

【タイムスケジュール】

○1日目

13:06 秋田駅出発（こまち28号 東京行）
 13:49 角館駅到着
 14:30 泰山堂到着（泰山堂オーナー藤井けい子さんの送迎）
 14:45 けい子さんと談笑
 15:30 自由時間（周辺の散歩）
 16:20 夕食づくり（きりたんぼづくり体験）
 18:00 夕食
 19:20 自由時間（入浴、カードゲーム、就寝準備）
 23:00 就寝

○2日目

7:00 起床
 8:00 朝食・雑談
 9:30 泰山堂出発
 10:00 角館駅出発
 11:30 秋田駅解散

【時系列順の感想】

	A	B	C	D
(出身)	首都圏郊外	秋田県中核市	政令指定都市	秋田県農村地域
出発前	わくわくと若干の不安	楽しみ	ドキドキと楽しみ	気楽
行きの旅程	☆景色の移ろいに落ち着く	☆目的地に近づくほどわくわく	落ち着かない	気楽
到着から1時間	囲炉裏などに新鮮さを感じた	自由時間に戸惑う	☆自由時間に戸惑う	☆建物の造りに新鮮さを感じた
夕食づくり	きりたんぼづくりで秋田県人の自覚	会話によって緊張が解けた	会話が楽しかった	懐かしさ
夕食	賑やかさが楽しかった	みそたんぼに感動	温かい雰囲気に着いた	後入れのきりたんぼに驚き
就寝前	囲炉裏に落ち着いた	アナログゲーム(ランプ)が楽しかった	ゆったりと過ごせた	実家のような安心感
朝食	けい子さんのエールに感動	会話がとにかく楽しかった	挨拶に親しみを感じた	普段通り
出発時	寂しさはなかった	帰りたくない	寂しさ	寂しさ
帰りの旅程	また来ようと思った	田園風景に感動	景色の変化で現実に引き戻される感覚	また頑張ろうと、リフレッシュした気分

(☆は日常から非日常に切り替わったタイミング)

【全体的な感想】

- ◆ 農作業等の田舎暮らしが体験できるメニューが用意されていると思って臨んだが、自由時間が多かったため、ギャップを感じたメンバーが多かった。
- ◆ 全員がオーナーのけい子さんと親しく会話することが楽しかったと感じたが、AとBはけい子さんと友達のような感覚で話したが、CとDは祖母のような感覚で話していた。
- ◆ この体験調査が終わった後、全員が充足感を感じた。

III. 理想のグリーン・ツーリズム

体験調査に行かなかったメンバーによって、想像でのグリーン・ツーリズムプランを考案した。

【旅行の目的】

19歳の私たちが旅行に行きたくなるのは、学校やテスト、人間関係などの現実から逃れたいからである。現実逃避は読書をしたり、音楽を聴いたりすることでもできるが、完全に現実から逃れる感覚は得られない。しかし、旅行は一時的ではあるが完全に現実逃避できるため、私たちは旅行に行きたくなる。日頃の生活リズムを崩して、自然に触れたり、未知の場所を訪れたりすることで、ストレスや疲労を取り除くことを目的とする。

【タイムスケジュール】

○1日目

- 8:00 朝日を浴びながら、目的地へ出発。車窓の景色を楽しみながら、リラックスして旅を始める。
- 10:00 目的地に到着。チェックイン後、その場所の空気を感じるために周辺を散歩する。
- 12:00 グリーン・リズムに基づいたヘルシーなランチを楽しむ。新鮮な地元の食材や有機栽培の野菜を使ったメニューを楽しみながら、非日常を感じる。
- 14:00 農業体験や川での釣り、自然散策など、その場所でしかできない体験を行う。
- 16:00 博物館やガイダンス施設などが近くにあれば、訪ねてその地域を知る。
- 18:00 直売所などから地元産の食材を集め、夕食の支度をする。
- 20:00 ヘルシーかつ栄養価の高いディナーを楽しむ。
- 22:00 入浴や読書、音楽を聴くなど、個人に合わせたリラックスタイムを過ごす。

○2日目

- 7:00 目覚めたら、散歩がてら日の出のきれいな場所を探し、景色を楽しむ。
- 8:00 ビタミンやミネラルが豊富な朝食を頂く。フレッシュフルーツやグリーンスムージー、穀物などを組み合わせたオーガニックな朝ごはんを選ぶ。
- 10:00 カヤックやサイクリング、ハイキングなどをして、その土地でしか味わえない遊びをする。

【世代背景】

Z世代と呼ばれる私たちは不知案内なことに関して全く興味を示さない。さらに、初めて経験することに関して拒否反応を起こす人も多いため、あまり知れ渡っていないグリーン・ツーリズムを余暇の手段として選ぶ人は少ないと考える。また、Z世代は暇な時間にSNSを見ることが多い。そのため、グリーン・ツーリズムが楽しそうだと思う広告や、行った人の投稿写真などの何かしらの視覚情報を見ないと行動に移しづらいことが予想される。

IV. 若い世代特有の感性からの評価

“理想のグリーン・ツーリズム”から分かるように、我々Z世代は事前に与えられる情報が少なかったり、得ていた情報と実際が異なっていたりすることに抵抗を示す傾向にある。しかし、実際にグリーン・ツーリズムを体験すると、情報の懸隔があったにもかかわらず、それに関して大した抵抗を感じることもなく受け入れ、農泊に充足感を感じる結果となった。また、今までの人生で生活してきた場所とは異なる周りに何もない場所での生活や、祖母ほど年齢の離れた他人との交流などを通して強い異郷感を得た。何もない場所に赴くことや、見知らぬ人と密接に関わることは、我々世代が経験してきた一般的なツーリズムでは体験することができない。

V. 提案—グリーン・ツーリズムからトポフィリア・ツーリズムへ

実体験調査ならびにツーリズムイメージングから得た評価を踏まえれば、若い世代に特有なグリーン・ツーリズムへの仮託は、「ほんのりとした／ゆったりとした／少しだけ高揚感（わくわく感）＝日常生活の延長と脱離」という体感を得ることにあると考えられる。

日常生活とは、普段生活する／している場所ともいえる。そしてツーリズムとは、その場所から移動すること／離れることだとも考えられる。我々若い世代は、高校生（～18歳）まで生まれながらの場所で、家族とともに日常生活を過ごしてきた者がほとんどである。結果として、日常生活は我々にとって当たり前のことであり、ことさらに意識（自覚＝客体化）することは難しい。だからこそ、大学生という新しいステージに入ることがこの日常生活の覚醒（客体化）の扉を開くことになるのではないかと考えた。

そして、この扉を開く導きの路としてグリーン・ツーリズムが位置づくのではないかと考えた。日常生活の覚醒は、非日常を体験することでこれまでの日常が新たな日常へと変わるようになる。これまでの生活の場所や生活のリズムに新たな意味を見出し、自分自身の生活/生存の意義を再確認することになる。これを端的に示すものとして「トポフィリア」という概念がある。それは自覚された自分自身であるための場所という意味で、私たちの日々の生活行動はトポフィリアを探す旅であるという哲学的な解である。これをグリーン・ツーリズムに持ち込むならば、「自分をリフレッシュする場所＝自分を再発見する場所」「日常生活をリセットするための装置（スイッチ）となる場所」を求めるツーリズムということになる。ここからツーリズムという行動が若い世代、特に大学生にとって日常生活を客体化させる導きの道（導路）であるということは、ツーリズムが「自分のトポフィリアを探す行動」であることを意味するものとなると考えている。

グリーン・ツーリズムを通して日常生活から一時的に離れる経験をするにより、あらゆる形でトポフィリアを意識することになる。グリーン・ツーリズムで訪れた地で未知の生活を体験することによって、そこで新たな境地を拓く者もいれば、改めて自分が生まれ育った場所に思いを馳せるきっかけを得る者もいるだろう。

いずれにしても、人生の転換期の一つになる19歳という年齢において、グリーン・ツーリズムを経験することは自己のトポフィリア形成において重要な役割を果たすであろう。

現状、グリーン・ツーリズムのホスト側が若者世代の満足度を上げるメニューを用意することは現実的ではない。ビジター側である若者世代が多少でも「トポフィリア探し」を意識して臨むようになれば、グリーン・ツーリズムが若者世代にとって意義のあるものになる。よって我々は、グリーン・ツーリズムの新たな施策としてトポフィリア・ツーリズムを提案する。